Osaka University
Forum on China

Discussion
Papers
in
Contemporary
China
Studies

No.2010-14

近代天津における買弁階層の社会イメージと自己認識

耿科研（蔦井亮佑・坂井田夕起子訳）

大阪大学中国文化フォーラム・ディスカッションペーパー No.2010-14

近代天津における買弁階層の社会イメージと自己認識 *

2010 年 5 月 15 日

耿科研**（蔦井亮佑†・坂井田夕起子‡訳）

---

* 本稿は 2009 年 8 月に大阪で開催された第 3 回「現代 “ 中国 ” の社会変容と東アジアの新環境」国際シンポジウムへの提出論文「近代天津买办阶层的社会形象与自我认知」を改編し，日本語訳したものである。

** 中国・南開大学歴史学院 2008 級博士生（指導教員：江沛）（gengkeyan2002@yahoo.com.cn）
† 大阪大学大学院文学研究科・博士前期課程
‡ 大阪大学法学研究科・特任研究員（ysakaida@law.osaka-u.ac.jp）

はじめに

買弁は近代中国の歴史における特殊な職業集団であり、20世紀の10年代から20年代において、学界ではすでに研究成果が発表されている[1]。その成果は現在に至るまでおよそ2つに分類することができる。1つは人物の研究であり、徐潤、唐廷枢、鄭観応などの研究がある。もう1つは集団の研究であり、買弁制度の形成と発展、買弁階層の社会経済状況および社会的地位、そして香山買弁、寧波買弁、江浙買弁など地域的な買弁集団の研究がある。近年来、買弁階層の心理分析を試みる研究者もおり、とりわけ、その「卑屈な心理」の分析は、買弁集団研究に新しい視角を提供している[陳国威 2004,2007,2008]。 筆者は、階層全体の特徴について概括する研究だけでなく、中国買弁階層の社会イメージと認識研究をさらに細かく分析する必要があると考えている。中国は広大で、文化、習俗と観念の地域差はとても大きく、また時期の異なる買弁の心理状態も同じとは限らない。近代天津は上海に次ぐ中国第2の貿易都市であり、この天津で活躍する買弁階層は一定のパターンがあり、その社会イメージと自己認識の特徴を分析することは、買弁全体の研究にも裨益するであろう。

Ⅰ．規模と地域構成

1860年に天津が開港すると、租界、洋商、洋行や洋貨などが出現し、買弁もまた次第に天津の歴史の中に登場することになった。天津の買弁階層の人数の性格な統計は存在しないが、天津の洋行の数をもとに規模を概算することは可能である。同治6（1867）年、天津には全部で17の洋行があり、光緒初年には30近くに増え[天津市地方志編修委員会 1996: 209]、 1906年には232にまで増加した[孫徳常他 1990:52]。第1次世界大戦の時期から戦後にかけて、日本やアメリカの洋行の数が激増し、1931年には外国の銀行が16行、洋行は合計21種類を数え、総数は109にもなった[宋蘊璞 1969:145,224-227]。1936 年には各国が天津に開設した各種の洋行は 982 にも達していた[天津市地方志編修委員会 1996: 209]。

開港当初、洋行の規模は小さく、どの洋行でも 1 人の買弁がいれば足り、光緒初年でも天津の買弁の数（買弁を経験者も含め）は百人程度だったはずである。1880年代以後、天津の買弁は階層を形成し始めた[羅澍偉 1993:201]。「開放された貿易港が次々に増えていき、どの洋行も多くの支店や代理店を設立した。どの支店や代理店にも買弁は存在し、これらの買弁は 1 人にとどまらなかったであろう」[郝延平他 1988:125]。同時期の中国の他の貿易港の買弁が規模を迅速に拡大していくとともに、天津の洋行もまた日増しに需要を増やしていく買弁によって、急速に拡大する貿易規模にようやく対応することができた。例えば、天津の洋行の数量に基づいて概算すると、清末の天津の買弁階層（買弁経験者も含む）は数千人以上にのぼり、抗日戦争勃発前までにこの数字は更に上昇した。

天津の買弁階層は、地域的特徴によって南北2つの帮に分かれていた。南帮は広東帮、寧波帮、安徽帮と江浙系を中心としており、北帮は主に地元の天津帮や河北、山東等地域を包括していた。

[1] 代表的な研究に以下のようなものがある。謝文華「買弁研究之回顧与展望」,『歴史学報』（台湾師範大学）1994年22期，pp.391-412．張萍「近代買弁研究綜述」,『清史研究』1996-1，pp.111-118.

Ⅱ．多元化する社会イメージ

近代天津の買弁階層は、富裕で生活も豊かでありネットワークも広く、洋行や外国の銀行に雇われる以外でも、彼らの活動は経済、政治、社会などの領域に及んだ。財力により高い地位を得て、天津で活躍する「高等華人」に属し、その社会的イメージもまた、多元的な特徴をみせた。

１）豪商

買弁階層は近代天津における最も富裕な階層の 1 つである。「四大買弁」を例にとると、広東帮の怡和洋行の買弁梁炎卿の全盛期の財産総額は 2000 万元に達していた[梁佩瑜 1987:41]。同じく広東帮に属す太古洋行の買弁鄭翼之が、息子に買弁の地位を継がせたときの財産はおよそ 1000 万元であった[鄭志璋 1987:68-69]。淮豊銀行の買弁で安徽人の呉調卿の給与は年に銀 20 万から 40 万両にもなり、1927 年に亡くなったときの財産は 4〜500 万両であった[呉煥之 1987:70-76]。寧波帮の買弁王銘槐は何度か成功と失敗を繰り返したが、資産は不動産、株券、貸倉庫、商店、銀行など多くの領域にわたっていた[王芷舟 1987:207]。

後発の天津帮は地理と人的ネットワークの面で優位にたち、買弁の仕事で蓄財する以外でも個人投資の領域は広かった。横浜正金銀行の買弁魏信臣を例にとると、彼と天津帮の杜克臣や高星橋などは親しく交際し、経営する産業も多岐にわたった。義豊成など多くの銀行に共同で出資し、魏信臣は丹華火柴公司の董事と嘉瑞面粉公司の董事長をも務め、北洋紡績工場、裕元紡績工場、益興紡績商店、同泰興紡績商店、そして同信成紡績商店にも投資した。そして、合同出資して勧業場と義信家屋不動産公司を経営し、フランス租界に貸しビル 4 ヵ所と宮北大街などに商業店舗や賃貸の部屋を自ら建てていた。

２）流行の生活

買弁階層は多くの財産を有していただけでなく、少しは西洋の習慣や風俗に通じており、物質面であれ精神面であれ、彼らはみな近代天津社会の前衛と称するにたる存在であり、流行を牽引し、「旧態依然とした封建地主と貴族を超越し、西洋の資本家階級を手本とし始め」、その生活は皇室や貴族と比べても遜色ない」ものであった[李明偉 2005:216]。近代天津の買弁階層は通常租界に豪邸を持っていた。梁炎卿、鄭翼之、呉調卿、孫仲英などの邸宅は建物の前に庭園があり、１階にはホール、リビング、食堂、応接室があり、2 階には寝室と先進的なバスルームが備えられていた。住宅の改善は居住環境の変化だけでなく、居住文化の進歩でもあり、総合的な質を高めることになった。

買弁家族は通常、伝統的な観念に基づく束縛を破ろうとし、子女の多くは小さいときから西洋式の教育を受け、その後留学した。梁炎卿の 15 人の子女は、西洋化した生活をおくり、英語を流暢に使いこなし、テニスや乗馬に堪能で、思想面でも開放的であった。『北洋画報』は、かつて「旅津富商梁炎卿第十一女公子」という題で、北戴河の水着姿の写真を掲載したが、写真の梁家の娘は泰然自若としておおらかな様子であった[北洋画報 1929/9/10]。

３）商界の顔役

買弁階層は新しい商人集団の重要な構成員であり、彼らは商界の顔役のイメージを天津商会において最も顕著に体現する存在であった。商会は「民挙」ないしは「公推」と呼ばれる方式を採用し、総理、協理、坐弁、会董などを選出した。『商会簡明章程』は公推される会董の水準を規定

して、「才能・地位・資産・名望が一定水準に達する」としている。統計によれば、清末に至り、天津商会の歴代30名の協理･会董のうち買弁は9名で､全体の30%を占めた[胡光明1986:200-204]。当時の天津の買弁階層が、「才能・地位・資産・名望」などの方面で影響力を有していたことが見て取れる。

買弁階層は、商業貿易についての経験と商界における影響力をよりどころとし、近代天津の経済発展に否定しえない貢献をした。義和団の乱の後、天津の景気が悪化したため、道盛銀行の買弁王銘槐は、「市場は活気がなく、金融業も繁栄していない」と指摘し、併せて商会に対して「天津金融業が臨機応変に対応する」ための多数の項目をあげて、貨幣流通の停滞という難題を解決するよう尽力することを求めた。1921年前後の中国の輸出状況は悪化しており、商会は会董である平和洋行の買弁杜克臣と大和洋行の買弁陳敬臣に相談した。杜克臣等は行商会議を招集し、書面での分析と提言を行った[天津市档案館他:上1989:775-778]。彼らは輸出停滞の第1の要因が第1次世界大戦後の各国の「金融逼迫と生計悪化」であり、第2の要因はわが国の「雑税運搬費がかかりすぎるためコストが高いから」と考えた。これにより、国内では「雑税の取消によりコストを軽くし、運送を保護する機を逃さずに商品を売りさばき、土や水を混ぜる事を禁止して品質を維持することに着手すべき。コストを少なくし、品質を維持すればアメリカに対抗でき、わが国の製品の販路を確保することもできる」と提言した。

４）公益事業に対する熱意

「中国近代慈善史において、買弁の貢献は重視されてこなかった。彼らの貢献は紳商と同程度であったが、その立場は紳商集団に次ぐものでしかなかった」[庄可栄2009:71-72, 88]。買弁は、「伝統商人、商人、金融家、工業家そして行商人とともに天津の商人集団を形成し、紳士層に加えて近代化の風潮の中で富を有する者として、天津における慈善救済事業の主要な参加者として活動した。」[任言蘭2007:67]

具体的に言えば、南帮買弁が寄留した天津では同郷意識が強く、公益事業は往々にして同郷の者に及ぶところから開始され、同郷会館が真っ先に建てられた。天津では相次いで十数省の同郷会館が建てられ、例えば広東会館、浙江会館、江蘇会館などがそうであった。同郷会館は同郷人間のよしみをつなぎ、同郷人と同郷人の社会活動の主要な空間としてひいきにされた。天津出身以外の買弁の慈善活動は、同郷人の狭い集団に限られることなく、天津社会の慈善事業に貢献するところが多かった。天津の四大買弁の1人王銘槐は、粥廠や善堂の運営、不定期に行う被災者の救済といった慈善活動に従事し、「王善人」と呼ばれた[王芷舟1987:214]。兵器商の買弁雍剣秋は広く布施を行い、広仁堂に寄付をし、長年にわたって恤嫠会の支援を行い、孤児、寡婦、未亡人といった行く当てのない人々を救済した。北帮買弁の被災者救済や慈善活動も他の買弁に引けをとらなかった。仁記洋行の買弁李虎臣は、城東門外で「済生社」の活動を行い、衣食の施しを行い、義塾を開設し、「小李善人」という称号を得た[秦穎1987:168]。

個人で慈善活動を組織する以外に、買弁階層は慈善機構にも加入した。例えば高星橋は、体仁南善社（俗称は南善堂）の董事の1人であり、毎年寡婦への救済を行い、毎月3回貧民に米を恵み、経費は董事が援助した。また、京劇の梅蘭芳、楊小楼、そして龔云甫といった著名な役者をしばしば招待し、南善堂でチャリティー公演を行った[任言蘭2007:154, 184]。20世紀に入ると、商会は天津の慈善事業の主な支援者となり、その指導層と会董等は常に各種の慈善事業の発起人

ないしは参加者であり、その中には買弁も多かった。例えば、商会の総理寧星普が 1915 年に設立した天津教養院は、善堂連合会や紅十字会といった慈善機構の董事も担当した[任言蘭 2007:212]。もし水害や旱魃が起これば、天津の買弁階層の救済支援と慈善救済は広く天津以外にも及んだ[天津市档案館他：下 1989:2134-2135]。また、天津独特の地理と工商業都市としての特徴によって、凶作の年には近隣だけでなく、他省の難民も天津にやってきて救済を求めるようになった。天津の難民収容所は彼らの生きる希望となったのである。

５）外国人の奴隷、民族の裏切り者

買弁階層は、上述のような明るい社会イメージを持つと同時に、暗いイメージも有している。一方で、近代中国はしばしば外国の侵略にあったが、買弁階層は外国勢力の高級雇用人として外国人の金儲けを助けた。そのため買弁の社会的イメージは、「外国人の奴隷」や「民族の裏切り者」といった側面を持たざるを得なかった。特に、民族の危機が顕在化した時期には、国民は買弁に対して一層多くのマイナスイメージを抱くことになった。また一方で、買弁階層の一部は確かに機会を見てうまく立ち回るか、権力をかさにきて悪事を働くので、もともと外国人や外国人の奴隷を憎んでいた田舎者に極めて悪い印象を残した。

義和団事件の間、買弁の孫仲英は外国兵を連れて天津各所で義和団参加者を探し回り、ゆすりやたかりを行ったり、裕福な家に押し入って強奪したり、塩の固まりを盗んで外国人兵士に売り飛ばし、一財産築いた[王芷舟 1987:208]。立興洋行の買弁陳少岩などは、義和団の乱にかこつけて、外国人の雇い主と結託して東局の官鉄を 5000 トン売り払い、国難に際して大もうけしただけでなく、両替店を探して保証人になる過程でも他人を死に追いやった。洋行や銀行の買弁は権力に頼んで非道に儲ける状況がしばしば発生したため、階層全体が社会的にマイナスのイメージを激化させることを免れなかった[天津市档案館他：下 1989:1943-1945]。

天津の義和団民は運動期間に多くの「外国勢力に依拠し、横暴な振る舞いをする民族のクズ」を呼び出し、「罪状によって処罰の方法も異なる」[魏伯剛 1982:16]とした。横浜正金銀行の買弁魏信臣は審問を受け、「日本人のために仕事をしているので、どうやら外国人の奴隷であるとみなされている。だが、顕著な悪行はないため、罰として 1 日跪かせ、家に帰らされた」。近代天津の買弁階層が形成されていく中で、義和団民の買弁階層に対する態度は大変激烈なものではあったが、理性を失うことなく事実に基づいて区別して対峙できた。

これらをまとめると、近代天津の買弁階層の社会的イメージは多元的な特徴を有しているが、その中でも最も目を引くのは集団としての買弁のイメージであり、これがまさに買弁が 20 世紀以後の当時の人が争って求めた職業となった原因の 1 つである。

Ⅲ. 買弁の自己認識

買弁集団の活躍は富と活気に満ち溢れており、急速に形成された新たな職業階層である。彼らは社会的流動性を高め、近代天津の社会変動を大きく推し進めた。伝統中国社会において主に官職や科挙合格という身分的要素によって決定されていた社会的地位は、財力という要素によって次第に挑戦を受けることになった。特に買弁階層が全盛期を迎える 1920 年代から 30 年代にかけては、多くの場合、財力が社会的地位の各方面――例えば居住地、活動範囲、ネットワーク、社会的名声などを決定した。近代中国の買弁階層の心理面について、ある研究者の分析によれば、

輝かしい買弁階層の内面世界を検討し、この階層を「農業、工業、商業とは違った職業」の集団は巨額の財産を有してはいるが、初期には自らの買弁身分について卑屈な心理に困惑したとしている。すなわち、外国人に対する卑屈な心理、中国人からの蔑視に対する卑屈な心理、出身階層の低さによる卑屈な心理である[陳国威 2007:52-56,117]。しかし、近代天津の買弁階層は、中国における買弁階層の中の重要な構成部分ではあるが、彼らの心理状態と自己認識の特徴は、他の地域の買弁と異なっている。

１）不明確な卑屈な心理

早期に開港した南方の都市に比べ、近代天津の買弁階層の卑屈な心理は明確ではない。卑屈な心理が際立っているかどうかは、主観的要素以外に彼らの置かれた社会環境の要素にも注意を払わなくてはならない。天津の買弁階層の中でも早くから活動していた広東帮や寧波帮の買弁は経験も豊富で、その多くは南方の開港場で洋行の仕事に従事した経歴があり、外国人の雇い主に従って天津にやってきて事業を開拓した。彼らの職業意識は比較的高く、基本的に卑屈な心理も存在していない。後発の北帮は、南帮買弁という模範が先にあり、活動を開始した後は南帮の壟断を天津買弁が打破するという局面が生まれたことで地元の人間としての誇りを持ち、自然と精神的負担も持ち合わせることがなかった。

当時の中国人が買弁という職業に対して持っていた早期のイメージについては、「軽蔑説」が共通認識となっている。最もよく引用されるのは、容閎が「買弁という身分は、洋行の奴隷の首領にすぎない」と言って、イギリス商人の宝順洋行長崎駐在の買弁に就任することを拒絶した事例である[容閎他 1915:48-49]。天津の洋行は当初南帮買弁の天下であり、天津の人々が参入するのは比較的遅かった。多くの研究者は買弁の主観面に着目して、天津の人々に「外国人を激しく憎んでいた」とか、「外国人の奴隷となることを潔しとしない」と注釈をつけた[劉海岩 2001:23]。上述の要素は排除できないとはいえ、それが全てというわけでもない。第 1 に、開港当初、各洋行が天津に来る以前は、一般に業務を熟知し、経験も豊富な南方人に買弁を任せた。天津の人々は商人ではあったが、買弁の経験を備えていなかった。第 2 に、洋行が天津にやってくるようになると、天津人が洋行と接触する歴史が始まり、その中で買弁と違った初歩的な役割をも演じ始めた。イギリス商の仁記洋行の李輔臣は、事務員から会計長に昇進し、最後には大買弁となった。知人もなく、土地に不案内で、また貨幣や度量衡の制度が複雑に混乱していたこともあり、洋行ではこれらの初歩的な役割の補助が、外国人の雇い主にとっても、また南方から来た買弁にとっても不可欠であった。天津の人々は、まさに洋行との初歩的な接触の中で徐々に経験を蓄積し、数年、数十年後には外帮勢力の強力なライバルとなり、買弁階層に身をおくことになった[張章翔: 74-75] [2]。第 3 に、北京への入り口、運河の要衝として、天津は開港以前から交通の便が良く、19 世紀中期以降、古い枠組や王朝は動揺を始め、大きな変化を生み、帝国の心臓に最も近い天津は、新しい事物の摂取を遅らせることができなかった。「租界において、伝統中国的な「官本位制度」は大きな衝撃を受け、とりわけ 20 世紀以後、商人や買弁は人から羨望を受ける職業となった。買弁の子弟も世襲して買弁となり、ある種の風潮を作り出した」[尚克強他 1996:206]。「当時、買弁

[2] 1923 年、興隆洋行の買弁葉星海は雇い主のギペリッチと利益をめぐって対立した後、辞任した。実際、葉の職員である天津人の高少洲はギペリッチと早くから結託しており、葉が辞職した後、高が後任となった。

は人から羨望のまなざしを向けられる職業階層だった。買弁階層は教育レベルが高いばかりか、その勢力も待遇も普通の家と比べて高かったのである。林希の父親の美孚油行における 1 ヶ月の基本給は 80 元分の銀貨、40 キロの小麦粉の市価相当の現金、そして、それ以外にも特別な報奨金を貰っていた。その額は、およそ給料の 2 倍以上にもなった」[雷暁宇 2005:104-106] [3]。買弁の家族化は一般的に行われるようになり、梁炎卿、王銘槐、鄭翼之、李輔臣などはみな、買弁という職業を子供に継がせた典型である。

近代天津の買弁階層は、中国人社会の中で身分が比較的高いだけでなく、外国人の雇い主やその他の外国人に対しても過度に卑屈な態度をとる必要がなかった。第 1 に、洋行は言語、度量衡、貨幣等で障害に直面するだけでなく、「優秀な買弁を招聘する競争」に直面した。買弁なしで洋行の業務は発展できず、このため外国人の雇い主は買弁と極力良好な関係を保とうとした。同時に、買弁は多くが独立した商人であり、外国人の雇い主に対して、絶対依存する関係にはなかった。第 2 に、多くの買弁は租界社会において比較的高い身分を有していた。例えば、道盛銀行の買弁羅道生、美勝家公司の買弁庄東峰、怡和洋行の買弁梁恵吾、太古洋行の買弁鄭慈萌などはみなイギリス租界の董事を担当し、庄東峰は副董事長も務めた。仁記洋行の買弁李志年は、かつてフランス租界の董事を担当していた[呉同賓他 1980:7-8]。

２）民族的帰属意識の表出

買弁は所詮外国人に雇われており、その外国人は近代に戦艦と武器と不平等条約によって中国の門戸を開いたのである。近代中国の惰弱な状況と在華外国人の存在は、とりわけ租界において示された西洋文明との間にあざやかな対比を形成した。買弁階層は外国貿易、ひいては文化や思想の仲介人として外国人との距離が最も近い階層の 1 つであった。「買弁の利益はときには外国人の利益と一致しているが、然し彼らは往々にして、外国の帝国主義的側面を敏感に感じ取った」[郝延平他 1988:270]。洋行が引き起こした中国人との間の訴訟には、大量の買弁と外国人の雇い主との裁判記録がある。自己の利益の脆弱さと近代国家の命運の揺れ動きは、買弁階層の民族意識を徐々に覚醒していった。近代天津の買弁階層も同様に「集団」の利益を自覚し始め、中華の一構成員として民族的な帰属意識について意識し始めた。

1905 年の反アメリカ・ボイコット運動の中で、道盛銀行の買弁王銘槐は商会を招集し、南北各地の商人が力を合わせることを模索し、「国民の共感を表明し、公共の義務を尽くす」として具体的な綱領を提出した[天津市档案館他:下 1989:1878-1883]。まず、平和的な手段の採用を保証し、国際条例に違反しないこと。次に商人が一致団結しなければならないとし、「天津各地商人たちは、南北各地の風潮を持っているが、みな中国の同胞であり、我々の仕事を分けるべきでなく、互いに力を合わせるべき」で、「人々は果すべき責任を負う」とした。さらに運動を継続し、団結したりバラバラになったりすべきではないとした。そして、各商店がお互いに助け合えば「商業界は 1 人も失業の無念に至らない」とした。また、反アメリカ・ボイコット運動を中国製品普及の好機とし、「利権を回収する一部」とした。最後に、自主的に監督を受けるよう各商店に呼びかけ、「人々はみな責任があることを知らねばならず、自分ひとりに関係ないと思うことがないよう」訴えた。

[3] 林希の元の名は侯紅鵝。1935 年に天津の名門の買弁に生まれ、中国当代の著名な作家となり、『買弁の家』を執筆した。

ワシントン会議の前夜、アメリカ商人の慎昌洋行買弁の陳光照は、全国各開港都市の洋行の買弁や買弁団体、貿易を行う商会、各新聞社に電報を打ち、天津行商公所の名義で天津洋商総会に手紙を送った。彼は電報の中で「買弁集団は、洋行に力を貸してはいるが、中華民国の国民の 1 人でもある」とした。そして、全国の買弁の同業連合に対して立ち上がることを呼びかけ、外国人の雇い主には、彼らの本国政府に以下のように伝達するように促した。「我が中華民国は、世界における独立の自由を侵されるべきものではなく、やむを得ず、最後の方法として総辞職の道を選ぶことにする･･･」[郭風岐他 1999:763]。1921 年 10 月 17 日、アメリカ公使が天津にやってきた。陳光照はアメリカ公使や駐天津領事と会談し、演説を行い、再度、「国民の 1 人として、良心からの主張」を直接外国人に対して激しい口調で述べた[郭風岐他 1999:764-765]。

実際、20 世紀以降、天津の買弁階層の民族意識は徐々に浸透していった。天津の勧業場は 1928 年末に竣工したが、フランス租界にあり、「工事が強固で、比類ない」とされ、建設者はドイツ商の井径煤砿公司の買弁高星橋であった。フランス租界工部局は何度も、この商業ビルを「法国」とか「法蘭西」などと命名したい意向を表明したが、どれもみな拒絶された。高星橋は「実業とは、国家を強化し、民衆を富ますための根本であり」、「我が民族の実業の発展は、必ず中国国産品の貿易を以って行い、市場の名称も民族精神や民族文化の発露の中から決めるべき」だとした[尚克強 2001:117]。商業ビルは最終的に「天津勧業場」と命名され、その精神は「わが同胞に勤勉な仕事と商業の発展を進め、市場の増加をはかる」というものであった[李煥有 1994:150]。実際に「全ての買弁が愛国的であったという意味ではない」[郝延平他 1988:270]が、しかし近代天津の買弁階層の全体を見ると、そこには民族意識が徐々に目覚めていったことが見て取れるのである。

まとめ

近代天津が開港されて以降、買弁という職業が現れ始め、1880 年代になって買弁は新しい社会階層を形成し始めた。初期の広東帮からその後の寧波帮、江浙系といった南帮の買弁がまず天津の買弁業を独占した。その後、地元天津や河北、山東などの買弁で構成する北帮買弁が勢力を拡大し始め、南帮と北帮の勢力が同時に存在するようになった。近代天津の特殊な経済的政治的環境は、彼らに才能を発揮し、出世を実現するための舞台を提供した。これによって、出身が同じでないものの、この階層は買弁による収入を通じて、自らの事業を経営するなど急速に天津で巨万の富をなし、豪商や商会の顔役、慈善事業における模範などによって近代天津における社会的イメージを活発にした。しかし、買弁も結局商人であり、その関心はまず利益と蓄財にあった。20 世紀以前、天津が開港当初、古い観念体系は大きな衝撃を受け、社会はある種の「基準を失った」状態にあり、長く貧困だった人々は自己の転換をもたらす全ての可能性に貪るように関心を持った。買弁も同様に経済的成功を求めており、自らと一族の命運を変えることを求めていた。「商人」は伝統的中国社会の観念における低い身分であったが、侵略者のために力を尽くし、機に乗じて手段を選ばない買弁商人は、当然、比較的苦しい立場の社会的役割を担った。しかし、買弁階層が有能で精力的であり、彼等が急速に富裕になると、同時に次第に輝きを増すまばゆい社会的イメージによって当時の人々に注目され、近代天津の個人的奮闘と成功の典型的な代表となっていった。

近代中国における買弁集団の一部である、天津の買弁階層は誕生が比較的遅く、このため彼ら

は先輩の経験を生かすことができただけではなく、相対的に開放的で寛容な社会環境に向き合うことができた。人々の買弁という職業に対する敵意と蔑視の程度は相当に低下しており、かわって羨望のまなざしが向けられるようになっていた。しかし、特殊な場面において、買弁階層は義和団事件の時のような、外国人の奴隷であるとか、民族の裏切り者といった心理的圧力を受けざるを得ず、また 20 世紀の民族主義の衝撃も受けることになった。しかし、一方で買弁階層は結局中国伝統文化の中から脱却し、「修身斉家」してから「治国平天下」となるという観念が浸透していた。このため、彼らは「買弁の職業が両親や家族ひいては故郷の人々がよい生活を得る」という精神的安らぎと悟りを得ていた。また一方で、買弁階層は西洋文化の影響を強く受け、商売への投資や自身の成功追及などを過度に批難すべきことでもないとも認識しており、彼等の自己認識も基本的に成功のイメージで、その社会イメージとの落差もそれほどなかった。こうした状況は、近代天津の買弁階層に対して卑屈な心理の困惑をあまり感じさせることがなかった。同時に、買弁階層は、その時代の外国人と接触が最も多かった中国人集団として、その民族意識も国家と個人の命運の発展と共に徐々に目覚めていき、「国家を栄え、国民を富裕にさせる根本」を考えはじめた。あわせて買弁階層は、自らの専門的な知識を利用して、中国人と外国人のビジネス戦争に成功をおさめる計画を提案し、徐々に中国の一員としての民族帰属意識と責任感を抱くようになった。

付 記

本稿の翻訳と校閲は，研究プロジェクト「現代中国研究：大阪大学における研究・教育プラットホーム構築のための条件整備」（2009 年度市川国際奨学財団 国際教育・学術・文化助成金，研究代表者：田中仁）として実施した。

参考文献

天津市地方志編修委員会(1996),『天津通志～附志•租界～』天津社会科学院出版社
孫徳常、周祖常(1990),『天津近代経済史』天津社会科学院出版社
宋蘊璞(1969)『天津志略』台北成文出版社
羅澍偉(1993)『天津近代城市史』中国社会科学出版社
郝延平著，李栄昌，沈祖煒，杜恂誠訳(1988)『十九世紀的中国買弁～東西間橋梁～』上海社会科学院出版社
李明偉(2005)『清末民初中国城市社会階層研究～1897-1927～』社会科学文献出版社
任言蘭(2007)『近代天津的慈善与社会救済』天津人民出版社
容閎著(1915)，徐風石，惲鉄樵訳『西学東漸記』商務印書館
尚克強、劉海岩(1996),『天津租界社会研究』天津人民出版社
天津市政協文史資料研究委員会(1987),『天津的洋行与買弁』天津人民出版社
天津市档案館・天津社会科学院歴史研究所・天津市工商連合会(1989)『天津商会档案匯編～1903-1911～』（上・下），天津人民出版社
『北洋画報』1929 年 9 月 10 日
郭風岐主編『「益世報」天津資料点校匯編』（一），天津社会科学院出版社，1999

陳国威(2004)『十九世紀（1840-1900）買弁心理試析』寧夏大学歴史学碩士学位論文
———(2007)「近代中国買弁的卑微心理分析」,『史学月刊』12 期
———(2008)「19 世紀買弁投資中国工商業的心理史分析」,『社会科学戦線』8 期
梁佩瑜(1987)「天津怡和洋行与買弁梁炎卿」，天津市政協文史資料研究委員会編『天津的洋行与買弁』天津人民出版社
鄭志璋（1987）「天津太古洋行与買弁鄭翼之」，天津市政協文史資料研究委員会編『天津的洋行与買弁』天津人民出版社
呉煥之(1987)「天津淮富銀行買弁呉調卿」，天津市政協文史資料研究委員会編『天津的洋行与買弁』天津人民出版社
王芷舟(1987)「我家三代買弁紀実」天津市政協文史資料研究委員会編『天津的洋行与買弁』天津人民出版社
華鳴岐(1987)「天津的洋行与買弁」，天津市政協文史資料研究委員會編『天津的洋行与買弁』天津人民出版社，1987
魏伯剛(1982)「天津横浜正金銀行与魏家両代買弁」『天津文史資料選輯』第 18 輯
呉同賓，張仲，辛公显(1980)「天津英租界概況」『天津文史資料選輯』第 9 輯，天津人民出版社，1980
李煥有(1994)「漫談天津勧業場的”八大天”」『天津文史資料選輯』第 62 輯，天津人民出版社
張章翔（1984）「在天津的“寧波帮”」,『天津文史資料選輯』27.
胡光明(1986)「論早期天津商会的性質和作用」,『近代史研究』1986 年
庄可栄(2009)「中国近代買弁慈善活動的経済学分析」,『淪桑』第 3 期
郝慶元(2001)「一生風言雍剣秋」，中国人民政治協商会議天津市委員会文史資料委員会編『近代天津十大買弁』天津人民出版社
秦穎(2001)「天津“仁記”李輔臣」，中国人民政治協商会議天津市委員会文史資料委員会編『近代天津十大買弁』天津人民出版社
劉海岩(2001)「広帮首富梁炎卿」，中国人民政治協商会議天津市委員会文史資料委員会編『近代天津十大買弁』天津人民出版社
尚克強(2001)「伝奇買弁高星橋」，中国人民政治協商会議天津市委員会文史資料委員会編『近代天津十大買弁』天津人民出版社
雷暁宇（2005）「天津買弁世家的日子和段子」,『中国企業家』18 期

大阪大学中国文化论坛 讨论文件 No.2010-14
Discussion Papers in Contemporary China Studies, Osaka University Forum on China No.2010-14

近代天津买办阶层的社会形象与自我认知

耿科研（蔦井亮佑、坂井田夕起子译）

The Social Image and Self-Awareness of the Comprador Class in Modern Tianjin

GENG Keyan (trans. TSUTAI Ryosuke and SAKAIDA Yukiko)

摘　要

在近代中国早期通商口岸城市中，买办阶层是一个光环与阴影并存的特殊群体。天津作为近代中国北方最重要的商埠，其买办阶层的基本特征与中国买办阶层整体的特征既同且异，具有比较重要的研究价值。本文认为，虽然近代天津买办阶层的社会形象同样呈现出多元化的特点，但其作为富商豪贾、商界领袖，且热心公益、生活时尚的形象是其中最突出的部分，因此，该阶层自我认知中的卑微情结并不明显，并且随着国家命运的起伏，其民族意识也日益显现。

（担当委員：田中仁）
http://www.law.osaka-u.ac.jp/~c-forum/box2/discussionpaper.htm